

変わらないものだけが変わるのか？ 変わるのは変わらないものだけか？

北 岡 崇

本稿は、平成24年度国際文化フォーラムでの口頭発表を文章化したものである。構成と論旨について予め一言述べる。本稿には、前半と後半にパラドックスを一つずつ配した。前半には変わらないものだけが変わる、変わるのは変わらないものだけというパラドックスを、後半にはその変わらないものとは活動そのものである自己意識であり純粋活動であるというパラドックスを配した。変わらないものこそが純粋活動であり、変化と言われるものは実は、活動性に不足する鈍重な存在だというのが本稿の論旨である。

本日のフォーラムの共通テーマは「変身」です。このテーマのもとに、私は皆さんにも大いに関係のある事柄を扱いたいと思っています。この話が、皆さん一人ひとりが自分自身について考えるきっかけになり、自分自身を、この話を聴く前より少しでも深く知るようになっていただけたらと思っています。

まずはタイトルを読み上げます。変わらないものだけが変わるのか？ 変わるのは変わらないものだけか？ 皆さんは、変わらないものだけが変わるという表現に奇妙な印象をもつかもかもしれません。変わるのは変わらないものだけだという表現にも同様に奇異な印象を抱くかもかもしれません。たしかに、変わらないものは変わらないとか、変わるものは変わるものだけだという表現を聞く方が日本語として落ち着きがいいです。

しかし、我々が普段の生活の中で変化を認めるときの状況を反省してみればわかりますが、我々が変化を認める際、我々は通常、変わらないものだけが変わる、変わるのは変わらないものだけだ、と考えているのです。……いかがでしょうか、……私の言う意味は、理解していただけますでしょうか？

少し理解しづらいと感じる人もいるかもしれません。私は何を言っているのかまだよく理解できない人には、後ほど事例に即して少し言葉を補う機会がありますのでその時まで待っていただくとして、まずここでは、今日の話のタイトルには奇妙な感覚、奇異な印象が伴うかもしれないということにだけ、とにかく触れておきます。そうした奇妙、奇異といった感覚が生じるかもしれないことを承知の上で、このタイトルを設定したということ、……今は、そのことだけ、皆さんに理解していただければ十分です。つまり、私が、タイトルを書き間違えたのではないということです。

はじめに

さて、このフォーラムの大きなテーマは、「変身」です。「変身」、と言えば、私の場合、まず念頭に浮かぶのはフランツ・カフカの小説のタイトルです。グレゴール・ザムザが巨大な虫に変身する話でした。おそらくは様々な意味を読み取ることのできる作品なのでしょうが、実はその意味の広さを、したがって作品の深さを私はまだよくは測定できていません。今日のフォーラムの参加者で誰か私にあの作品のおもしろい読み方に気付かせてくれるようなレポートなり発言などをいただけるならとても嬉しいことです。カフカの『変身』に次いで私の念頭に浮かぶのは、ラテン文学、……ラテンアメリカの文学ではなく、古代ローマ時代のラテン語文学ですが、『転身物語（メタモルフォーセス）』という作品が念頭に浮かびます。ギリシャ・ローマ神話には様々な転身、変身の物語がありますが、それを紀元元年の前後あたりの時代に生きたオウィディウスが収集し纏め直したのが『転身物語』です。美少年ナルキッソスが水仙の花になったり、ダブネが月桂樹になったり、ゼウスが牡牛に姿を変えたり、ピュグマリオンが象牙を用いて彫刻した女性像が生身の女性に変わったり、他にも、荒唐無稽な変身の話がたくさん詰まっています。皆さんもいくつか聞いたことがあるかもしれません。

概して、我々は変身の物語を好むようです。何故、好むのでしょうか。私自身は、『転身物語』のような作品が2000年以上も読み継がれてきたのは、変身願望、もっと一般的に言うなら変化への欲望、……おそらくこれは革命への意志、何であれ変革を待望する心と同種の願望ですが、こうした願望が人類に普遍的に備わっているからだと考えています。

実は、カフカの『変身』の場合、変身することが当人の希望であったわけではなさそうですし、オウィディウス『転身物語』にも意に反して変身させられてしまう物語が数多く集録されています。それでも我々は、とにかく変身の可能性に何かを託してしまうからこそ、変身の物語を好むのではないのでしょうか。その変身が、望み通りであれ、心ならずもの場合であれ、意に反してであれ、とにかく変身が可能だということ、この変身の可能性に、自分の存在を託したいという願いが、人間に普遍的に備わっているような気がします。

我々は、多くの人が、芝居で自分の役柄を演じるのに夢中になったり、お洒落やお化粧を試みたり、コスプレにエネルギーを費やしたり、誰かを理想化しあの人みたいになりたいと願ったりするのをしばしば見かけます。しかしながら、もう一方では、お洒落やコスプレをしても自分が変わったような気がするだけで本当の自分自身は何も変わらない、むしろ実際には、変身した気になっている分、本当の自分から目を背け、自己から逃げているだけなのかもしれない、それなら本物の自分は何も変わらないのであるから、変身の努力なんて無駄だ、と考える人も少なくないとも推測できます。

多いとか少ないというより、おそらくは、たいていの変身願望の場合、その内容が具体的に明確なものであればあるほど、同時に、その人は、その変身願望に導かれて自分が至り着くその姿、その新しい自分のあり方が自分自身の願望、欲望にとっての最終的な姿ではない

ことくらいは初めからわかっているし、その意味において、概して変身それ自体にはある種の退屈さ、詰まらなさが伴うものだというのを、変身を願う当人自身、すでに十分気付いているのではないのでしょうか。

ここで今日の私の話の結論を先取りするなら、それは、もっとも強力で人類に普遍的な究極の変身願望とは、自分自身とは異なる別の存在になることへの欲望ではなく、あるがままの自分自身を生きたい、あるがままの自分自身でありたいという欲望であるということ、自分自身の生の証、自己存在の証を立てたいという人間に根源的な、それ故きわめて普通の、すべての人間に行き渡り普遍的に認められる欲望であるということです。これが今日の話で一番言いたいことです。芝居の役柄に没頭するのも、お洒落をするのも、実はあるがままの自分自身に至り着くまでの迂路、回り道です。何故そのような回り道を辿らなければならないのか、その理由は、よくはわかりませんが、おそらく、簡単に言うなら、本物の自分自身は自分自身の目には見えないように巧妙に隠されているから、とでも言えるのではないかと思っています。

1. 変化一般

そのような結論に向けて言葉をつないでいくという意図を持って、私は今、変身というテーマ、つまり本日のフォーラムのテーマを少し拡張して、変化一般と解釈し直して話をしています。

子供が大人になることや、しっかりした大人が老年期にボケになったり、誰かが髪を短くカットしたりする際、こういう場合もたしかに身体上の、また行動面での何らかの変化が認められます。その意味では変身していますが、本日のフォーラムで言う変身とはちょっとニュアンスが違うような気がします。しかしここにも、変化を認めることはできます。頭脳明晰であった彼が寄る年波には逆らえずボケ始める場合も、子供が大人に成長する場合も、普段は繊細で弱虫に見える少年が何かの弾みで勇敢な英雄になる場合も、変化があります。そしてこういう場合は、変化の前と変化の後を貫いて変わらない同一の人間が想定されています。人間とは異なる例を挙げるなら、氷が水になったり、その水が水蒸気になったりする場合も、固体、液体、気体と在り様を変えても変わらない同一のもの、例えば H_2O という記号で指し示される同一のものが想定されています。その変わらないもの、同じであり続けるものを根底に想定した上で、我々は始めて変化を認識する、……これが、つい先ほど、我々は、我々が変化を認める際、通常は、変わらないものだけが変わる、変わるのは変わらないものだけ、と考えている言ったことの意味です。このことは、我々が普段の生活、日常生活の中で変化を認めるときの状況を反省してみれば容易にわかることです。髪をカットしてショートヘアになっている人と髪をカットする前のロングヘアの人は同じ人です。同じ変わらない人がいるからこそ、髪を短くカットするという変化の事象が生じるのであり、カットの前後の人が別人であるのなら、ロングヘアの人とショートヘアの人がいるだけで、髪をカッ

トして短くした同じ人はいないことになります。そして、誰も自分の髪をカットして短くすることはできないということになりかねません。勇敢な英雄になることを願望し実際に英雄に変身するのは、先ほどまで弱虫であった同じその人です。

こんなことを考えながら今日の話のタイトルを決めました。

しかし、タイトルの末尾に着目してください。疑問符がついています。変わらないものだけが変わる、変わるのは変わらないものだけ、という考え方は、我々の日常的な変化についての考え方、——変化に関する我々の判断の前提になっている考え方であることは、つい今しがた説明した通りですが、この考え方において想定されている変わらないものとはどのようなものなのでしょうか？ この疑問にどこまで応えることができるか、それが本日の考察において私が最も大切と考える問題です。以下の話の中で、変わらないものとは何なのかという問題に私なりに答えていきたいと思います。

2. スコラ哲学の言う actus purus

子供が大人になる場合、その成長を認識した人、成長したその人に例えば「大きくなったね」とか「立派になったね」とかの言葉をかける人は、姿形がすっかり変わった目の前の人を見て、その人と10年以上も前のその人の記憶を重ね合わせ、そこに同一の人間を認めています。また、その言葉に、「はい、先回お会いしてからもう10年以上経ちますから」などと返しの言葉を語る成長した当人も、10年前の自分と今の自分が同一の人間であると自認しています。こうした際の同一の人間とは誰なのでしょうか？

それは同一なので、変わらないものであるには違いないのですが、その変わらないものとは、気質とか、人格とか、性格とか、比較的安定したその人の特性のことなのでしょうか？ もちろんこうしたものは、端的に変わらないものというわけではありません。端的に、絶対的に変わらないものであらねばならないとしたら、それは、何か凝り固まったもの、一切の活動性とは縁のないこの上なく硬質の核のようなもの、芯のようなものなのでしょうか？ 私の考えはこうです……たしかに核のようなものであり、芯のようなものである。しかし、少しも凝り固まってははいないし、むしろ一切の活動性の源泉、自由そのもの、であるというものです。

ここで、私の考えの背景を、大雑把にはありますがザッとお見せすることにします。まず中世スコラ哲学の用語の一つを紹介します。スコラ哲学には、神という絶対者へののみふさわしい表現として actus purus という言葉があります。英語に翻訳するなら pure act、日本語なら「純粹活動」と翻訳される言葉です。さらにこれを、誤解や曲解の危険を顧みずあえて比喩的に言うなら、煙も音も立てずにひたすらに燃焼する炎とでも言うことができます。要するに、それ自体が活動そのものであり、ポテンシャルティ、つまり可能性を一切欠いた完全なアクチュアリティ、現実態、自己実現の完成態、それ故、可能態として留まりいまだ燃焼していない部分が少しもなく、完全燃焼しつつある活動のことです。これは、ポテンシャル

リテイ、可能態を欠いているので、もはや変化しません。発生も消滅もしない純粹活動です。スコラ哲学はこの言葉によって、神が絶えず目を覚まし、居眠りや、昼寝などせずに永遠に活動し続ける存在であることを表現しようとした。概してキリスト教においては、神、あるいは神の活動は、発生することも、消滅することもない、永遠の活動であるとされていますが、この捉え方をアリストテレス哲学を用いて説明しようとしたスコラ哲学が *actus purus* の用語を用いたのです。

スコラ哲学のこの用語をここに紹介したのは、二つの理由に基づいています。一つは、スコラ哲学は、完全な現実態を意味する *actus purus*、「純粹活動」という用語によって、完全者である神は変化を強いられることも変化を願望することもないという 2000 年来あり続けた考え方を説明しようとしたという事実を示すためです。もう一つは、バイブルの冒頭の書物である『創世記』が語るようにもしも人間が神のかたちにかたどられているのなら、あるいはニーチェが言うように、逆に、神が人間のかたちにかたどられているにしても、要するに神が人間を創造したのであれ、人間が神を考案したのであれ、いずれの場合でもスコラ哲学の言う *actus purus* と同型のもの、あるいは類似のものが、人間の中にも存在するはずだと考えたからです。

3. 人間の内なる変わらないもの

人間の中にある、*actus purus* と同型のもの、あるいはそれを考案する際の原型と考えられるそれと類似したものとは何でしょうか？ 私は、人間の中にあって変わることなく（それ自体が他の存在へと変貌を強いられたり、他の存在への変貌を願ったりすることなく）あり続けるものとは、人間の自己意識であると考えています。ちなみに、人間の身体、物質としての人間、肉体は、刻々生じつつまた同時に消滅していきます。一年も経てば肉体の大部分が別の物質と入れ替わるそうです。しかし自己意識は、同じ一つの自己意識において、過去と未来を現在において同時に把握するとともに、遠い存在と近い存在を並存させて同時に見渡すという性格、つまり特定の時間や特定の空間に束縛されないという性格を持っており、この意味において自己意識は自由であるとも言えます。

たしかに人間は、その人間が生活する空間と時間（経験科学の言葉で言うなら地域と時代や世代）によって制約されています。しかし自己意識に対しては、その制約は何の効力も持ちません。考える人であるなら、つまり自己意識を持った人であるなら、すなわち多忙やストレスや恐怖、あるいは同じことですが臆病のために失神している人でなければ、——もちろん比喩的な意味での失神ですが——誰でも、自由を意識し、目の前に突きつけられたいわゆる現実に対してでさえ、その改変を考えたり、それに先立ちそのいわゆる現実の否定を考えたり、その現実を拒絶したりできます。もちろんその現実を肯定し、その現実の継続を望むこともできます。ここに言う否定、肯定、願望、改変への意欲、これらはすべて、考える人間の自由を証するものです。人間は、その肉体がある境遇に投げ込まれているという意

味においては不自由であり束縛されているとも言えますが、自己意識、つまりその境遇に対する意識（対象意識）に随伴する自己意識において、投げ込まれているという一方的な受動性をすでに脱却しており、自由を享受しています。

また、その自由を享受する自己意識そのものは、これとかそれとか指し示した上であれこれポジティブに形容できる対象、主題化できる題材とは異なり、そもそも言葉では十分には表現できないものです。先に、ニーチェの言葉を用いて本物の自分自身は自分自身の目には見えないように巧妙に隠されていると言いましたが、その隠された自分自身を言い当てるのは至難の業のようです。これをあえて言葉で表現しようとする、先ほどの *actus purus* を炎に喩えたときのように、すでに理解している人の目にはその内容をいくらか曖昧化することになりますし、まだ理解していない人にとっては理解に役立つのに劣らず、その人を誤解と曲解に導くことになりかねません。幾人かの哲学者は、比喩という感性的な水準の言葉には頼らずに、論理的な水準の言葉を用いて、自由な自己意識を表現しようとしてきました。その場合は、自己否定的な表現、自己破壊的な表現、すなわち自己矛盾を内包する表現に行き着くのがお決まりのようです。例えば、そういう思想家の一人がジャン＝ポール・サルトルで、彼は、その主著の一つである『存在と無』（1943年）において、この自由な自己意識のことを、あるところのものではなく、あらぬところのものであると自己矛盾を孕む言葉で表現しています。彼の言う意味は次の通りです。……あるところのものとは、あれとかこれとか指し示すことが可能で、それについてあれこれポジティブな形容を許容するもの、認識の対象となりうるものことであり、自由な自己意識はそうしたもの、あるところのもの、ではない、と言うのです。むしろ自由な自己意識とは、あれとかこれとか指し示すことが不可能で、ポジティブな形容を一切拒否するもの、議論の対象となりえないもの、主題化されえないもの、すなわちあらぬところのもの、である、つまり無であると考えたのです。

4. 制度——歴史と社会——

いずれにせよ、「純粹活動」は言葉には収まらないのです。どれほど軽やかな言葉でも、歌のようになった言葉でも、言葉は一般に活動を立ち止まらせるという性格を払拭できないからです。そしてまた、人間の言語にかたどられて形成されるしかない制度、特定の歴史や社会を成り立たせる制度もまた、言葉と同様の硬直性を免れてはいません。寛容の美德や寛容の精神がどれほど尊重される歴史＝社会状況であっても、人が生活する特定の歴史＝社会状況は、例外なく必ずその人を抑圧し、その人が本物の自分自身に気付くことを、つまり自由な自己意識の成立を困難なものにしてしまいます。そのような状況でおのれの肉体をもって生活する人、つまり我々は皆、絶えず自分を取り巻く状況に窮屈さを感じざるをえません。体力、健康、美貌、感受性、知力、財力、などの面でどんなに恵まれていても、この窮屈な思いを完全に免れることはできません。この窮屈さは、いわば、本来の自分自身が心ならずも何者かの力に屈し望ましくない姿に変身させられている場合の感覚と同じ感覚です。この

窮屈の感情を押し隠そうとして我々は、しばしば空しいおしゃべりにふけったり、無邪気な悪ふざけを楽しんでみたりもするのですが、この窮屈さの感情こそが自分自身を、その本来の姿、あるいは望ましい姿へと変化、変身させるよう駆り立てる当の原動力なのです。つまり望ましくない変身を強いられているという不自由感、窮屈感こそが、本来の私に回帰したいという欲望を覚醒させるのです。ですから、究極の変身願望は、すべての変革への願望と同様、願望する当の人が自分自身をまともに生きてみたいというごくありふれた欲望に発しています。この欲望はありふれています。しかし、いまだ歴史においても社会においても実現したことのない事態が到来することへの希望であり、決して満たされることのなかった、それゆえ今なお我々において止むことのない欲望なのです。その意味においては、自由な自己意識は、それを担って特定の歴史＝社会状況の中で生活する各々の人間にとっては、さしあたっては絶対的な他者のように映じるのかもしれませんが。つまり、本物の自己自身が当人にとって絶対的な他者であるように思われるのです。(自分自身をまともに生きてみたいという欲望が決して満たされず、その充足が不可能であるのは、特定の歴史＝社会状況に身を置く自分自身を温存しながら本物の自分自身を生きたいという人間のやり方そのものに無理があるからです。)

この欲望は、様々な形式、互いに異なる無数の形式においてその充足を求めます。すべての文化活動の形式がその欲望の現象形態であり、不完全ながらもその充足形式であると言えます。すべての変化の成立の根底にあってその変化を可能にするものは、それ自体変わることなく存在する自由な自己意識です。その自由な自己意識が、それを忘れそうになる各々の人間にその人自身へと立ち返るよう呼び寄せる声が、この声に聴きたがう者には、変化、変身、変革への願望として自覚されるのです。(2012年6月23日発表)